

# 第19回全国産業教育フェア神奈川大会における 「キッズビジネスタウンかながわ」の実践

神奈川県立平塚商業高等学校教諭 穂田 智範

## 1. はじめに

千葉商科大学の登録商標である「キッズビジネスタウン」(以下キッズタウン)は2003年3月29、30日に第1回が開催されて以来、同大学キャンパス内において年に1回行われているが、中澤興起教授を中心としたこの取り組みは、今日の子どもたちに必要なキャリア教育として認められ、2006年、2007年度の文部科学省「現代GP」に選定されている。

～目的: 参加児童～ 「子どもたちが作る子どもたちの街」の理念のもとで、「みんなで働き、遊ぶことをとおして、共に協力しながら街を運営し、社会の仕組みを学ぶ」ことを目的とした教育プログラムである。参加する子どもたちは以下を学ぶ。①働く楽しさや喜び、大切さ②目的達成のための協調と思いやり③物を大切に作る気持ち④社会の仕組みやビジネスの必要性⑤想定外の出来事への対応

～仕組み～ 参加する児童は①～⑦の流れで行動する。①事前予約②住民登録③仕事探し④出勤⑤転退職⑥給料受取⑦消費活動 ※③～⑦繰返す。

## 2. 神奈川における「キッズビジネスタウン」

### (1) 実施決定までの道のり

全国産業教育フェア神奈川大会の準備にあたり、商業専門部(商業系学校の集まり)が、いかに小学生や中学生に魅力ある産業教育フェアとするか検討する中、「働く小学生企画」を高校生がマネジメントする案が出た。これは千葉商科大学の実践を学んだ教諭からの提案であり、熱心に議論が重ねられたが、コンパクトにまとめると稚拙、本格的に行うのは遠大であるため、一旦は実現を断念した。

しかし、県教育委員会産業教育フェア担当(商業科教員出身)から県教育委員会に提案し「全国産業教育フェア神奈川大会において小学生に対し、専門高校をPRするのであれば、商業専門部が検討している小学生企画は非常に魅力があるので、ぜひ実施したい。」となり、実施に向け急ピッチで進められた。

担当は商業専門部、中でも県立平塚商業高校が総

務担当となり、後に横浜市立横浜商業高校が加わった。全国産業教育フェアにおいては初めて実施することから、プレ大会を併せて行うこととなった。

### (2) 担当校としての期待と不安

初めての試みなので、大変な反面、同時に大きなチャンスであると捉えた。本校が取り組むチャレンジショップと絡ませ、地域連携事業を発展させることができる。まだ全国でも実践例が少ない取り組みに生徒達を「パイオニア」として体験させることができる。さらに、発展的な展開が期待できるかもしれない。不安要素は多いが、商業科はもちろんのこと普通教科の協力も得て、学校全体でこの試みに「前向き」に取り組むことになった。

## 3. 企画から実施まで

### (1) 「キッズビジネスタウンいちかわ」の視察

2009年3月7、8日、「キッズいちかわ」を県内各高校の商業科職員が視察した。

※ 以下キッズビジネスタウン○→キッズ○と略記。  
～視察の感想など～ ①学生スタッフが自主的に活動②地域の住民が運営に参加③小学生のときに参加した中学生が運営に参加④保護者の職業体験への手伝いは禁止⑤自由な雰囲気があるが整然とした一面もある⑥リピーターが多い。仕事熱心なあまり消費活動に興味なくなる傾向も⑦企業が受付等のシステムを開発し、無償で提供 など

視察後、商業専門部職員向けに報告会を行った。

### (2) 「キッズビジネスタウンひらつか」の実施

～イメージ～ ①可能な限り生徒中心に展開②地域を巻き込み展開③オリジナリティの追求④市教委や小学校との連携⑤本大会の想定で行う。

～事業内容～ 企画概要は当初から決まっているが、本大会を想定し就職時間に制約を設けた。また、運営の中心である高校生に対する目的を再設定した。

～目的: 高校生運営スタッフ～ ①システムをマスターすることにより、商業における知識の他、発想から具現化までの過程を学習、深化させる②経済循

環の各場面で児童のサポートをすることで責任感を持たせる。また、児童や保護者、団体企業の方々と協力し合うことをとおして、コミュニケーション能力の向上を図る③運営スタッフ同士が共通の目的に向かうことで、達成感や充実感を得る。

～オリジナリティの追求～ 「湘南平塚たなばた祭り」の舞台となる本物の商店街を舞台とし、野外スペースを使用し、イベント性を兼ね備えた。

～給料について～ 商店街で使用できる域内通貨を発行し、経済効果を実験した。

～生徒組織～ 生徒の実動母体は授業単位、部活動、生徒会、授業等を組み合わせる形で展開した。実施日をチャレンジショップ事業の最終日に合わせ、チャレンジショップ参加生徒＝キッズタウン実行委員会とした。生徒たちが初めての企画運営を担うことに不安もあったが、実行委員長、副委員長、会計はすべて立候補で決定、約100名の生徒を牽引した。

～教員の補助～ 行政組織、企業団体へのPRと説明に奔走した結果、好意的に捉えられ、小学校や商店街へのアプローチはスムーズだった。

～生徒の活動～ 商店街調査、広報活動、受付業務と多岐に渡る。特に児童への説明会は高校生が直接行い、マスコミを通じ「商業高校が新しいことに取り組んでいる。」ということが街中で話題となった。

～実施概要～

ア 日時：8月9日(日)開会式9時半～ 体験10時～15時 閉会式15時～

イ 会場：紅谷町まちかど広場および商店街協力店舗

ウ 担当：(総務担当)神奈川県教育委員会高校教育課、県立平塚商業高等学校(運営担当)商業専門部担当校(生徒実行委員会組織)県立平塚商業73名、平商PR部、県立厚木商業4名、県立小田原総合ビジネス4名

エ 後援：平塚市(経済部、商業観光課)、平塚市教育委員会、崇善小学校PTA、松原小学校PTA、平塚市商店街連合会、平塚商工会議所

オ 協賛：商店街協力店舗約20店舗、平塚市立大野中学校、(株)ローランドほか

カ 内容：

- ・平塚市内の小学5・6年生を対象、事前予約により約100名が参加。当日参加も若干あり。
- ・公共施設・食品販売・製作・学習等約20の体験。
- ・1ブース30分～90分の体験時間とした。
- ・域内通貨(まちかど商品券)を保護者へ販売、

銀行券と共に商店街で11,470円使用された。

- ・広報活動：小学生説明会実施、湘南ホームジャーナル、タウンニュース、FM湘南ナパサの取材を受け広報。湘南ナパサはライブ中継を数時間にわたり放送。神奈川新聞は10日朝刊に記事掲載、tvk(テレビ神奈川)は当日取材内容を10月16日に本大会の広報とあわせて放映。

～本大会に向けての検証～

- ・企画内容自体は小学生や保護者から評判がよい。
- ・受付が非常に混雑する。特に体験開始時刻。
- ・高校生スタッフは事前研修が必要。また、当日は教職員が手を出しすぎている面がある。
- ・当日状況によるルール変更を想定し、運営スタッフ間の当日の連絡方法を整備するべき。
- ・昼食休憩を確保することが大変。ほか

(3)「キッズビジネスタウンかながわ」の実施

～広報活動～ 事前配布チラシを13,000枚県内配布。横浜市内の小学校数校に訪問し広報活動を実施。

～実施概要～

ア 日時：11月14日(土)開会9時半～ 体験10時～16時 15日(日)体験10時～ 閉会式15時～

イ 会場：パシフィコ横浜アネックスホールホワイエ(受付他)展示ホールB他(就職ブース)

ウ 担当：(事務局総務)神奈川県教育委員会高校教育課、県立平塚商業高校、横浜市立横浜商業高校(商業専門部)県立：相原、商工、厚木商業、平塚商業、小田原総合ビジネス、市立：横浜商業、川崎市立商業、私立：高木学園女子(生徒実行委員会)平塚商業70名、小田原総合ビジネス13名、横浜商業12名、商工11名、厚木商業9名

- ・協力専門部担当校 県立：二俣川看護福祉高校、横須賀明光高校(平塚盲学校)、平塚農業高校、平塚農業高校初声分校、相原高校、中央農業高校、吉田島農林高校、海洋科学高校、その他：県内及び全国物産販売担当校

エ 協力・協賛：

- ・(ブース等)神奈川県警察本部、神奈川新聞社、(株)サークルKサンクス、(株)下倉楽器、tvk(テレビ神奈川)、横浜信用金庫、日本FP協会神奈川支部、システム・フューチャー(株)
- ・(啓発品・機材)千葉商科大学(他9企業団体)

オ 内容：

- ・県内の小学4～6年生対象、事前予約で2日間約400名、当日参加とあわせて延べ665名が参加。

- ・団体企業、各専門部、運営ブース等 29 の体験。
- ・体験時間 1 単位約 1 時間、計 2 時間までとした。
- ・域内通貨（100 カナメコイン）を 3,000 枚用意。2 時間労働で 500 カナメの給料を支払い、100 カナメを所得税とする。40,700 円が物産販売やコンビニ体験、約 100,000 円がキッズデパートで消費。

カ ブース別当日参加人数：警察官 55 新聞記者 32 コンビニ 17 テレビ局 36 夢の実現プラン 68 信用金庫 72 楽器修理と整備 65 商業専門部（6 ブース）49 プチナース 35 介護 9 特別支援 14 農業専門部（6 ブース）89 船運転の仕事体験 1 カナメちゃんショップ 14 クリーンアップ 11 銀行 26 税務署 10 デパート 42 広報部 15



写真：「パンの販売体験」県立中央農業高校

～アンケート（保護者向け・感想や意見抜粋）～

- ・例年にない良い企画であると聞きました。働くことについて考えることは小さい頃から始めるべきで、このような企画を多く企画ほしい。
- ・障がいを持った子どもでしたが、帰ってきた時の第一声が「楽しかった」と言っていました。ありがとうございました。
- ・高校生がいきいきとしていてよかった。
- ・結果、第一希望の仕事ではなかったが、分からない仕事を体験させていただき、普段目が行かない仕事や、知らない仕事を体験させることができた。
- ・本人がやりたい仕事ができるとうい。（他多数）

～反省と検証～ ※ 関係者からの反省をまとめた。

#### 4. 実行委員体験記 キッズタウン実行委員長

県立平塚商業高校 国際経済科 3年 岩淵百花  
「小学生の街を創る。」その内容に魅了されると同時に、その壮大さに圧倒された。気が付けば実行委員長に立候補、「絶対成功させたい。」と決意した。

企画を進めるにつれ、大勢のスタッフの支えや、個々が役割を意識し団結することがより大きな目標

への力となることが分かった。学年、学校に関係なく協力するようになった。時には団体企業に出向いて気持ちを伝えた。当日の想定外の展開も、仲間が連携して乗り切った。私は企画の「顔」として、笑顔で対応し続けられたことも収穫だ。

誰かのために何かをするには、不安や失敗、面倒な気持ちが伴うが、相手（＝小学生）の笑顔や感謝の言葉がそれ吹き飛ばしてくれたのだ。今回沢山のひとと出会い、協力して「キッズビジネスタウンかながわ」という一つの「作品」を完成させた達成感はとてとても爽快である。「本当にお疲れ様でした、そして、素晴らしい経験をありがとうございました。」

#### 5. 総括

「キッズタウン」の第 19 回全国産業教育フェア神奈川大会での実践においては、小学生から大人まで、多くの人がそれぞれの立場で企画に取り組んだのだが、人同士がつながること自体大きな財産であり、その中での学びは大きなものであると実感した。

「キッズひらつか」では地域の商店街、学校、行政との連携に加え、商業高校間の職員生徒の連携を行うことが出来た。「キッズかながわ」にむけてステップアップを遂げられたこと、多くの企業、団体や各専門高校が連携して事業として販売を見せたこと、これは県全体の専門教育のボトムアップから発展に関わる非常に大きな一歩ではなかっただろうか。

経済循環の面では、域内通貨が実際の商店で使用され、消費活動に貢献できたことは意義深いものだ。

高校教育課や各専門高校担当職員より「商業高校が発想して全体が動くのはよい。またやりましょう。」という言葉を多数いただいた。また、文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室西村修一教科調査官より労いの言葉を直接いただいた。

「商業力」が問われる中、キャリア教育の手法として確立されている「キッズタウン」に取り組み、目的を達成することで、検定取得重視型の学習では得ることが難しい「発想力やコーディネート力」などを身につけることができるのであれば、それは意義深いものだ。商業教育、専門高校の柱の一つとして取り組めば、ノウハウは蓄積され、より深みを増すと思われるので、継続的に取り組んでいきたい。

※詳細な報告書、マニュアルなどの問い合わせ先  
神奈川県立平塚商業高等学校 TEL.0463-31-2385  
E-Mail hiratsuka-ch@pref.kanagawa.jp